

## ●特集●

## 架け橋プログラムのその後

今号の特集テーマは、「架け橋プログラムのその後」です。さまざまな立場からの原稿を拝読して、施設の間だけで成り立つものではないことが実感されます。それぞれのお立場から架け橋プログラムの未来を想像してください。

### 幼小移行を生きる当事者である子どもの語りから学ぶ

松田 登紀

終わりがあるから始まりがあるんだよ。私たちだって好きで幼稚園を終わらたいんじゃない。  
小学校が始まるから、幼稚園は終わらなくちゃいけないんだよ。(U, 年長児 (5歳期))

2月、筆者が園を休職するという選択についてふと不安を口にしたとき、Uさんが語った言葉である。長年、園児を小学校へ「送り出してきた」と思っていた私は、彼らの生活世界からその地平を見てこなかったのではないか、と揺さぶられた。彼にとって「小学生になる」ことは、「小学校が始まるから」今の園児としての実践は「終わらなくちゃいけない」のだということを知った。そして私はこれまで彼らの傍らにいたにもかかわらず、彼ら一人ひとりの市民としての実践を知ろうとしてこなったことに気づいた。

### 幼小を移行する実践がもたらす学び

5歳期・小学1年生・小学2年生と個別の語りを追跡した調査(松田, 2025)では、園児時代に15回以上の小学校での活動を経験していても、研究参加者の半数は「(小学校は)思っていたのと違う」と意味づけた。残りの約半数は、「同じ」「違う」と意味づけが時々揺れ動いた。そして、2年間変わらず「(小学校は)思っていたのと同じ」だと意味づけた参加者はわずか5%だった。

(小学生は)なんか幼稚園よりも、もうちょっと1個育った人じゃなくて、なんか幼稚園で1回学んでから1回それを小学校の気持ちになって、なってから小学校になるのが小学校。(P, 小学1年生)

2年間変わらず「(小学校は)思っていたのと違う」と意味づけたPさんにとって、「小学生(小学校)」とは『1個育った人』という垂直的次元ではなく、幼稚園での学びの文脈を『小学生の気持ちになつて』経験するという水平的次元での学びとして意味づけた。彼にとって「小学生(小学校)になる」とは、これまで対峙してきた世界の「文脈に埋め込まれた」(Lave & Wenger, 1991/1993)道具と自己との関係を再構築していく実践であった。つまり幼小移行の実践そのものが彼にとって学び、だったのである。

### 幼小移行経験を後方視的にまなざす

例えば、20分休みがあって、そのときに本当に遊べばいいのかわからなかったりする時とか(困った)。(中略)(それはどれくらい困ってた?)それはすごい1年生の時が終わるぐらいまではすごく困ってた。(M, 小学4年生)

架け橋プログラムの取り組みでは、学びの連続性の視点から「文字」や「教科」など乳幼児教育とは異なる道具の援助へと意識を向けることが多い。しかし小学4年生のMさんは、幼稚園でも存在した遊びを中心とした時間である「20分休み」での振る舞いや過ごし方への困惑が1年間続いたことを語った。当事者の語りは、幼小移行期には言葉だけでは理解できない空間性や身体性など非言語実践の構築が多分にあることを私たちに教えてくれる。

この他、自らの存在としての「声」の価値が幼小では異なることへの気づきや、4年生になっても幼小移行の葛藤が継続している語りなど、幼小移行経験を後方視的にまなざす当事者からは多種多様な意味が語られた(松田, 2025)。

### おわりに

世界的にも課題とされている幼小移行期については、その複雑性・多層性・多様性が明らかにされ始めている。日本においても、移行(transition)実践の一つとしての幼小移行経験という視点から、当事者がどのように幼小移行を生きているのかについて、市民としての子どもの語りに学ぶ必要がある。筆者も引き続き、未だ語られていない子どもの声とともに生成する機会を構築していきたいと考えている。

ジーン・レイヴ, エティエンヌ・ヴェンガー(著),  
佐伯胖(訳), 福島真人(解説)(1993)状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—. 産業図書.

松田登紀(2025)園児・児童は幼小移行経験をどのように意味づけるのか—当事者の「小学生」になるとどう語りの分析—. 奈良女子大学大学院 博士論文.

### ●Profile

松田 登紀(まつだ とき)

奈良女子大学附属幼稚園 教諭、奈良女子大学・畿央大学 非常勤講師

子どもが一市民として今ここで創造する知識に日々学び、子どもとともに人間中心的なあり方を揺さぶる実践を構築している。生成カリキュラム開発やICT活用による学びの変容にも関心をもっている。

## 「子どもの幸せをつなぐ架け橋として」

山崎 美鈴

幼保小架け橋プログラムの取り組みが始まり、私たちの園でもカリキュラム作成に向けて学ぶため、積極的に研修会に参加してきました。研修ではモデル地域の好事例を知る機会も多く、「地域に合ったよりよいカリキュラムは、自治体・小学校・教育保育施設が同じ思いで対話を重ねることから生まれる」と強く感じました。とくに実践報告の中で、小学校の先生方が園児の姿から学びを見出している様子を知り、大変励まされたことを覚えています。

対話を重ねることで、小学校の先生方の考えを知り、地域の園同士で思いを共有できます。また、幼児教育の特性を理解し合う場にもなります。さらに、教育保育の現場で大切にしている「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」をどのように子どもの成長として捉えているかを具体的に伝える機会にもなり、理解を深めるきっかけとなると考えています。

国も「子どもの成長を切れ目なく支えるために幼保小の円滑な接続を意識すること」「乳幼児の特性や発達を踏まえ、多様性や0～18歳の学びの連続性に配慮しながら教育内容や方法を工夫すること」「子どもに関わる大人が立場を越えて連携・協働し、この時期にふさわしい主体的・対話的で深い学びを実現すること」の重要性を示しています。まさに、自治体・小学校・園が一緒に取り組む意義を語っていると感じます。

私たちの地域でも令和7年度から、本格的に架け橋プログラムに向け会議を開くなど動き始めています。しかし実際には、モデル地域のようにスムーズに進める難しさを感じています。現状では小学校との連携が必要支援児の情報提供にとどまることが多く、行事などの交流はあっても、定期的な会議で小学校と園の違いにまで踏み込んだ話し合いは十分にできていません。

また「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」についても、小学校側では到達目標として捉えられがちです。本来は、日々の遊びや生活の中で子どもが見せる成長の姿を切り取ったものですが、その理解が十分に広がっていないように思います。教育・保育の現場として丁寧に伝えていく必要があると感じつつも、「遊びと学びの関係性」を言語化する難しさに直面し、理解を得ることの困難さを覚えることもあります。同じような課題を抱える園や小学校も少なくないと考えています。

子どもたちが園で培った経験を小学校で生かし、一人ひとりが「ここで生きる幸せ」を感じられることは、特別な配慮を必要とする子だけでなく、すべての子にとって大切です。そのため、地域に合ったカリキュラムをつくり、実践していくことが求められています。未来を担う子どもたちにとって最善の環境を保障するために、今こそ大人同士が互いに学び合い、歩みを揃えることが必要だと感じています。

幼保小架け橋プログラムの意義を改めて胸に刻み、

自治体・小学校・園が本質的な理解を深めながら、ともに歩みを進めていけることを願っています。

### ● Profile

山崎 美鈴（やまさき みすず）

社会福祉法人平和会

幼保連携認定こども園いとよ保育園園長

保育者が安心して働き続けられ、子どもも大人も自分のやりたいことを大切にできる園を目指しています。日々の小さな工夫を積み重ねながら、園づくりに取り組んでいます。

## 接続の鍵は“大人の交流”にあり —架け橋プログラムの現場から見える 課題と可能性

棕田 善之

大学院時代に幼児教育と小学校教育の連携・接続に関する研究を続け、大学教員になってからは、現場へ出向き、指導助言などを行っている。そのような中、「連携（交流）はできてきているものの接続（カリキュラム作成）までいかないため、どうしたらいいか」という相談が増えている。実際に、文部科学省（2024）「令和5年度幼児教育実態調査」のデータからも、ステップ2「年数回の授業、行事、研究会などの交流があるが、接続を見通した教育課程の編成・実施は行われていない」が48.9%で最も多い割合になっており、これからステップ3「接続を見通した教育課程の編成・実施が行われている」に向けて実施している自治体が増えていることがわかる<sup>1)</sup>。また、「幼児期から小学校への移行期における教育の連続性」は、OECDなどでも重要視されており、国際的にも注目されているテーマとなっている。

近畿圏の自治体を回る中で、接続を実現するためには欠かせないことは、子どもの交流以前に大人が交流することにあると感じている。幼児教育と小学校教育の専門性を持った者同士が対話を通して子どもの姿（幼児期の終わりまでに育ってほしい姿など）を見取り合うことで、指導のあり方や、教材の工夫、子ども一人ひとりの学びのプロセスを見つけ直す機会になる。互いの視点が混ざり合うことで、新たな気付きと実践が生まれることを見てきた。「できない」ではなく「できること」を探り、「やらなければ」ではなく「面白そう・やってみよう」から始めることを重視してほしいことを伝えている。

このような幼小の交流も大事であるが、就学前教育だけの交流も重要である。なぜなら、近隣の園がどのような取り組み（保育）をしているのかについてまだまだ知られていないことが多い。これからは、保育をよりオープンにし、地域の子どもを育てる共同体としての意識を持ち、架け橋期にどのような子どもを育していくのかについての意識を各園は持つ必要がある。そのためにも、地域の子ども像を話し合い、架け橋期に目指すべき子どもの姿を共有し、

それぞれの実践に反映していくことが架け橋プログラムに求められることである。

しかし、このような接続を実現していく際に最も難しいことは大人が交流する「時間」をいかに調整するかである。この調整は、各就学前施設と各小学校の保育者・教員が連携・接続の重要性をどの程度認識しているかどうかによっても大きく変わる。また、調整する際には、自治体側から交流連携地区を決められている方が進めやすいという声も聞く。これまでに、このような現状を乗り越えて接続を実現している園所校では様々な効果が見られた。

例えば、朝の会の時間（30分程度）に「遊び」を取り入れたことで、4月に泣いてくる子どもやトラブルが無く、何よりも子どもたちが学習の時間にうまく移行するきっかけになったということがあった。また、「これまで小学校で算数の時間に箱の形で学習する時間があったが、箱で遊ぶ子どもが多く、注意をしなければならず、困っている」という相談があつたため、保育者との交流をしてもらった。そこで、「子どもたちは空箱を使って自由に発想したものを作ることが多くある」という話を聞いたことにより、次年度からこの算数の時間の前に図工の時間を持ってきて、箱を使って様々な物を作るという時間を設けた。その後の算数の時間がとてもスムーズに進み、作ったものからも図形に興味を持ったことによって子どもの学ぶ意識が大きく変容したという事例もある。

今後は、大人の交流時間の確保のためにも、自治体による制度的支援や保育者・教員の意識改革、遊びの効果の可視化などを行い、架け橋プログラムのさらなる充実に向けて実施する地域を増やしていくことが求められている。

#### 【参考文献】

文部科学省(2024)「令和5年度幼児教育実態調査」p.21  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youchien/20240517-ope\\_dev03-1.pdf](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/20240517-ope_dev03-1.pdf)  
 (閲覧日：2025/09/29)

#### ● Profile

棕田 善之（むくだ よしゆき）

関西国際大学

研究テーマは「就学前後の子どもの期待や不安の変容過程—子どもへのインタビュー調査を通して—」で、兵庫教育大学大学院修士課程から博士課程まで就学前後の子どもへの縦断的なインタビュー調査を基に研究を進めた。大学に就職してからも、尼崎市で約10年間、幼保小連携推進委員会のアドバイザーとして幼保小連携・接続の取組を行ってきた。

とづくりプログラム」を策定し、校種を超えた教育体制の構築に取り組んできました。その一環として実施された「幼保小の架け橋プログラムに関する調査研究事業」（以下、「架け橋事業」）に、私は、西南学院大学 門田理世先生・同大学院生 岩渕善道さん・神戸親和大学 高橋一夫先生らと共に研究チームの一員として関わり、実践の視察やインタビュー調査を行いました。

令和5年10月に初めて津和野を訪れた際、小学1年生と5歳児が一緒に活動する“共同実践”を観察しました。その中で、活動内容として設定されていたシャボン玉遊びにはあまり興味を示さず、時間いっぱい道具作りに取り組んでいる1年生がいました。保育を学んでいる私の目には、道具作りに熱中しているその様子が主体的に遊び込む子どもの姿に映りました。一緒に観察をしていた小学校の校長先生にそのことを話したところ、校長先生はその子の良さは認めながらも「生活科だからそれが許されたが、国語や算数など他の授業では難しい」と言われました。これは私が気付けなかった視点であり、双方の立場から互いを理解する必要性に思い至ったと同時に、架け橋期の保育・教育を考えるのは簡単なことではないと痛感しました。

以来、私は“架け橋”とは何か、“保小連携”には何が必要なのかということを考え続けながら架け橋事業に関わるようになりました。インタビュー調査を通して、保育者も小学校教諭も行政関係者も、それぞれが悩みながら試行錯誤している実態もわかつてきました。一方で、モデル地区での年4回の共同実践とその前後の打ち合わせ・振り返り会議や、保育者と小学校教諭の合同研修などを重ねるうちに、保小の垣根は徐々に取り払われていったように思います。振り返り会議での「（話し合いを重ねることで）大人の目線合わせができた」という保育者の言葉、小学校1年の担任が3年間の架け橋事業を振り返って語った「最初は遊びながら、それぞれの興味関心に向かっていく姿を大事にして、それを学習につなげていこうと思い始めた」という言葉が印象に残っています。私は津和野の保育者・教育者から、“架け橋”とは園児と小学生の交流にとどまらないものであり、子どもに関わるすべての大人の協働が求められること、保育観・教育観の問い合わせを迫られるものであるということを学びました。

3年間の架け橋事業が終了し、人事や予算の変動に伴う新たな課題が生じる中でも、津和野の保小の連携は継続しています。行政関係者から「モデル地区以外でも共同実践が定着してきた」「転任して来た小学校教諭には、これまでの実践だけでなく意図や想いを伝えている」「町を離れた小学校教諭が、赴任先でも津和野での経験を基に幼保小連携に取り組んでいる」という現状を聞き、3年間で培ったことが継承されているだけでなく広がりを見せていることに、安心すると共に喜びを感じました。

保育者・教育者が目の前の子どもを理解しようと

## 大人の目線合わせが作り上げた「架け橋」：島根県津和野町の取り組み

増田 吹子

島根県津和野町は、人口6875人（令和2年度国勢調査）の小さな町で、平成30年に「0歳児からのひ

し、具体的にできることを検討して実行した津和野の実践から、私達が学べることは多くあります。また、その根底に子どもの健やかな成長を願う想いがあつたことも忘れてはなりません。私は来月、今年の共同実践を視察する予定です。保育と小学校教育、行政の関係が土台となって作り上げられた“架け橋”的上で、子ども達や先生方のどんな新しい姿を見ることができるとか、今から楽しみにしています。

#### 参考) 津和野町「まちの概要」

<https://www.town.tsuwano.lg.jp/www/contents/1000000016000/index.html>

#### 0歳児からの人づくり事業

<https://www.town.tsuwano.lg.jp/www/contents/1515570765427/index.html>

津和野町架け橋プログラム事業 <https://www.town.tsuwano.lg.jp/www/contents/1741909250309/index.html>

#### ● Profile

増田 吹子（ますだ ふきこ）

尚絅大学こども教育学部こども教育学科准教授。担当科目は、保育内容総論や実習指導など。現在は保育者養成校の教員として働きながら、西南学院大学人間科学研究科博士後期課程に在籍し、架け橋事業や赤ちゃん事業における調査研究に取り組んでいる。保育現場と乖離しない研究や保育者養成を心掛けている。

る地球協同体的カリキュラムとして育まれています。

けれどもそこには、常に問い合わせともあります。藍の肥料の選択、園バスの排気ガス、自然体験に向かうその道すがら——すべての「よきこと」は、他の「いのち」への問い合わせとともにあります。子どもたちと共に立ち止まり、悩み、聞くことのなかにカリキュラムは形づくられていくのです。

ある日、保育室の棚に並んだ透明な瓶の水に、子どもがそっと色を混ぜていました。光を透かしながら、ただその世界とたわむれるように時間を過ごしています。

一見なんでもないその光景に、私たちは「世界を自分に溶かしつつ、自分を世界に溶かしていく」感性の科学、存在の哲学、そして遊びの芸術を見出しています。子どもが遊ぶとき、世界はゆっくりと再構築されていくのです。

そしてこの喜びの瞬間を、どのように私たち大人が感受し、感応しているか——それが、そのまま「教育・保育という営みの本質」を映し出しているのではないかでしょうか。

異なる文化や価値観をもつ実践者同士が、経験を持ち寄り、語り合うこと。その交差のなかに、新しい問い合わせや課題が生まれます。教育・保育のあり方が、そうして発酵していく。そのプロセスこそが、「手を伝う」Lifeカリキュラムの可能性をひらいていくと感じています。

私たちはいま、「計画」だけで未来を描くのではなく、子どもと共にわきあがり、生成され、共創・蓄積されていく発酵メタファーのカリキュラムへと、歩みを進めようとしています。「育てられる存在」から、社会や世界をともにつくりゆく〈共生成者〉として子どもを尊重する視点が不可欠です。

子どもたちもまた、生老病死や愛別離苦など、「四苦八苦」に出会っていくでしょう。けれども、幼いころから世界と自由に響き合い、遊びをとおして世界を編みなおす「遊想力」が育まれていれば、どんな状況であっても、自らのいのちを祝福しながら、世界と共に未来をつくっていくことができるのではないかでしょうか。

「架け橋」は、人生そのものをつないでいく、手渡しの営みです。

子どもたちの生活と人生、そしていのちを抱きとめる教育・保育が、誰ひとり取り残すことなく、すべての子どもをかけがえのない共生成者として迎え入れながら、世界とひびき合い、未来をひらいていくことを、心から願っています。

#### ● Profile

杉本 一久（すぎもと かずひさ）

(社福) 宇治福祉園 理事長 みんなのき三室戸こども園 園長  
(一社) 京都府保育協会会長  
(公社) 全国私立保育連盟保育・子育て総合研究機構研究企画委員  
社会福祉学修士

田中 みゆき（たなか みゆき）

(社福) 宇治福祉園 みんなのき黄葉こども園 園長  
保育者・看護師養成校非常勤講師  
教育学修士

駒井 哲郎（こまい てつろう）

(社福) 宇治福祉園 みんなのき Hana 保育園 園長  
保育者養成校非常勤講師  
教育学修士

## 地球の未来を展望する「手を伝う」 Life カリキュラムへ

杉本 一久・田中 みゆき・駒井 哲郎

「教育は、個人の成功や競争のためではなく、私たちを“生きている地球”的うちに完全に位置づけるものである」

「教師は、何かを一方的に教える存在ではなく、学習者と共に問い合わせを立て、学び合い、知を共に再構築していく存在である」

「教育とは、出会いと変容の営みであり、未来へひらくされた実践である」

UNESCO が発表した『私たちの未来を共に再想像する教育のための新たな社会契約（2021）』は、このような地球規模の「問い合わせ」を、幼保小の教育・保育の実践にどう響かせていくのか。今、私たち一人ひとりに問い合わせています。

宇治福祉園では、1973 年の設立以来、「生命を大切にする」という理念のもと、保育・教育・福祉を地域と共に歩んできました。ここでいう“生命”とは、人間だけではありません。草花や虫、土や水、時間の積層や記憶の痕跡——そのすべてを「いのち」としてまるごと引き受ける実践が、日々紡がれています。

藍を種から育て、米や梅干し、味噌を仕込み、歌や踊りで行事を祝う。それらの営みは、単なる伝統の継承ではなく、子どもたちと「いま」を共につく

## 「元行政マンから見た架け橋プログラムのその後」

田坂 嘉章

私は元行政マン、広島県に奉職後、福祉、土木など様々な分野を担当し、教育委員会事務局に17年間 在籍した。県教委では、「『遊び 学び 育つひろしまっ子!』推進プラン」(2017年2月)の策定や、乳幼児教育支援センター(2018年4月)の立ち上げ、そして初代センター長として乳幼児期の教育・保育の充実に携わる機会を得た。退職後、2024年4月から現在の園の園長として勤務している。現在、こども園 園長として2年目。こども園特有の組織・文化に戸惑いながらも子どもたちから元気をもらい、幼児教育・保育の奥深さを感じている毎日である。

まず、乳幼児教育支援センター当時を振り返ってみたい。「『遊び 学び 育つひろしまっ子!』推進プラン」は教員・保育士等の研修の充実等とともに幼保小連携教育の推進などを施策の柱としており、幼保小連携・接続についての研修を実施するとともに市町での推進体制の構築に努めていた。

竹原市は令和4年度から6年度まで、国の架け橋プログラムの指定を受け、こども園・小学校の教育・保育の相互参観、こども園教員・小学校教員の合同研修、接続カリキュラムの見直しなどに市をあげて取り組んできた。園長として勤務したときに行政マンとして取り組んでいたことが、保育現場で実際に動いていることに感動を覚えたことを鮮明に記憶している。

竹原市では、3年間の成果を受け、市教委・こども園所管課主導の連携・接続から、市内を中学校区に分け、小学校・こども園が地域の実情に合わせた形で自走できるよう取り組んでおり、幼保小の連携・接続を継続的な課題として取り組んでいる。

このことには三つの要因があると考える。

まず竹原市には公立こども園3園、私立こども園5園、小学校・義務教育学校9校が設置されており、コンパクトで、連携・接続が比較的行いやすい規模である。

次に竹原市教委、こども園所管課が部局の壁を越えて幼保小の連携・接続に積極的に取り組んでいることである。特に竹原市教委は、架け橋プログラム受託前に乳幼児教育支援センターの長期派遣制度を活用し、小学校教員を1年間幼稚園に派遣し、研修終了後、1年生担任として接続に取り組んだ後、指導主事として勤務させている。接続のキーパーソンを育成して取り組んだことが現在の竹原市での取組につながっている。

そして三つ目は、小学校、こども園とも教職員が楽しんで、子どもの交流、教員同士の交流に取り組んでいることである。連携・接続にはお互いが顔の見える関係となることが求められる。竹原市ではこうした機会の充実に積極的に取り組んでいる。公立

のこども園、小学校では、園長、校長が異動すると連携の取組が尻すぼみになるという話はよく聞くが、そうならないために行政による仕組みづくりと、園、小学校の自主性を尊重した取組の土壤がある。

小学校ではスタートカリキュラムを策定している小学校の割合は急激に伸びているし、また研修も各県の教育センター等での研修、市町村教委の研修など、体系的かつ継続的に実施されており、連携・接続に関する取組は確実に進んでいる。

一方で、園は設置形態も設置者もさまざま、私学においては建学の精神、各園の保育理念に基づいて、日々の教育・保育が行われ、研修もそれぞれの園に任されている。県や関係団体が実施する研修に積極的に参加するとともに園内研修に取り組み、保育の質の向上に力を入れている園がある一方で、積極的とは言えない園があるとも聞く。また、小学校教諭が保育参観した際に、「保育環境がすばらしい」、「子どもたちに禁止の声掛けが少ない」などの感想をよく聞くが、一方で園では「○○をしないと小学校に行って困るから…」と教え込む場面もあると聞く。今後、連携が進むにつれて、将来、小学校教員から保育環境や子ども主体の考え方について厳しい指摘が出てくるかもしれない。

こども園では、認定こども園教育・保育要領等で求められている教育・保育が実施できているのか、また園の教育・保育について小学校や保護者、地域の方々に理解してもらう努力をしているのか、とらえなおす必要がある。小学校との連携・接続を一つの機会として、行政や小学校の力も借りながら、自らの教育・保育の充実に努めていくことが大切である。これこそが将来の架け橋プログラムに求められるものとなっていくだろう。

### ● Profile

田坂 嘉章 (たさか よしあき)

広島県竹原市立たけのここども園園長。元広島県教育委員会事務局生涯学習課長兼乳幼児教育支援センター長。2024年3月広島県退職後、同年4月から現職。

## 架け橋プログラムの成果と今後への期待：モデル地域における成果検証から

野澤 祥子

2022年度から2024年度にかけての3年間、架け橋期のカリキュラムの開発や実施等に取り組む19の自治体が採択されました。東京大学大学院教育学研究科教育学研究科附属発達保育実践政策学センター(CEDEP)では、19自治体を対象に、3年間の取り組みに関する成果検証のための調査研究を行いました。調査研究では、自治体の担当者、園・小学校の管理職および担任の先生へのアンケート・ヒアリング調査を実施しました。調査にご協力くださった皆

様に、心よりお礼申し上げます。

特筆すべきアンケート調査の結果として、「子どもへの関わりや指導方法が変化したか」という質問に対して、変化した（「とても変化があった」「やや変化があった」を合計）という割合は、園の管理職が56%、5歳児担任が70%、小学校管理職が69%、1年生担任が76%でした。多くの園・校の先生方が、子どもへの関わりや指導の変化を実感していました。

担任の先生の実践・意識が具体的にどのように変化したかを語りながらみてみましょう。ある1年生担任は「園の先生方から直接話を聞くことができ、『1から教える』という意識だったものが、『つながったところからのスタート』という意識をもつようになつた。生活科を中心に行き橋の活動をしているが、『幼稚園、保育園ではどんなことをしたかな?』という導入のスタートをするようになつたり、声かけや活動の作り方が変わった。」と語りました。5歳児と1年生のつながりを意識するようになり、子どもの経験に耳を傾けるようになったようです。また、ある5歳児担任は、「自分で考えるとか、友達同士で相談したりしながら解決していくことを大事にしている。意識するとしないではすごい違う。(子ども同士の)振り返りを大切にして、次の活動に取り入れたりしている。」と語りました。子どもの主体性・協同性を重視し、子どもの声を聴く活動を意識的に取り入れていることが示唆されます。

このような意識・実践を促したと考えられる要因として語りの中で挙げられていたことの一つは、園校の先生たちが、合同会議で共通の視点やカリキュラムなどを共有しながら、率直な話し合いができたということです。特に、「顔の見える関係」の大切さは、複数の人が語っていました。また、保育・授業参観や子ども同士の交流を通じて、実際の姿を見て

語り合うことの重要性も指摘されていました。実際の様子を見ることによって、自らが暗黙の裡にもつっていた、園や小学校、5歳児や1年生のイメージが変わるということが生じたようです。

以上のように、架け橋プログラムのよさは、園校の先生方が顔の見える関係の中で率直に対話し、お互いの教育や子どもの姿を深く知ることにあるのではないかと思います。そこでは、何を大事にするかという教育の視点が重要になります。「遊んでいる姿」「授業を受けている姿」のように漠然と見るのではなく、何を学んでいるか、どんなところが育っているかという視点をもって子どもの姿を見ることで、子どもの学びや育ちのありようが見えてくるということが、子どものイメージの変化につながるのではないかと思います。さらに、先生が子どもの声を聴くようになるということが、子どもたちの主体性や協同性の発揮につながるという点もとても重要だと感じました。

事業の初年度には大変だったり、混乱したりしていることも窺われましたが、関係性や相互理解の深まりとともに意識や実践が変化し、子どもの姿が変化したことが、先生たちの手応えにつながったのではないかと思います。ぜひ関係性と対話を大切に、持続可能な取り組みとして架け橋プログラムを進めていただけることを期待しています。

#### ● Profile

野澤 祥子（のざわ さちこ）

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター 特任教授  
保育・子育てと子どもの発達に関する様々な研究に取り組んでいる。今後、気候変動、AI等テクノロジーの発展、急速な少子化、社会経済的格差の拡大等、子どもを取り巻く環境が大きく変化する時代における保育・幼児教育のあり方について理論的・実証的に検討していきたいと考えている。

## リレー討論

## 自分たちの手でつくる保育のコミュニティ

山本 一成

### はじめに

本リレー討論は、2023年5月の磯部会員を筆頭に8名の論者がバトンを渡すかたちで展開してきた。最終走者として、これまでの走者が駆け抜けてきた道を振り返りつつ、これからの中「地域に根差した保育」のかたちを考えてみたい。

### これまでの討論から見えてきたこと

第1走者の磯部会員からは、東日本大震災の教訓とそこから見出だされる希望を通して、一律化されたマニュアルでは展開することができない「つながりの文化」の場としての園の役割が提言された。第

2走者の高木会員は、それを受け、自園の実践を紹介しつつ、子育ての伴走者であり個性をもった主体としての保育者の姿を描き出した。第3走者の松井会員の原稿は、子どもが大きくなり、親になった後も地域にあり続ける園という場が、人々が世代を超えてかかわりあう「共創」の場であることを示した。第4走者の中西会員は、実際に多様な仕方で園を地域にひらく工夫を紹介し、地域の人々は私たちが想う以上に「子どものために何ができるかを考えてくれる」というメッセージを伝えてくれた。第5走者である上村会員は、一見「競争相手」に見える地域の他の保育施設が、保育について共に考える「同志」

となることで、地域全体の保育の質が高まっていくという視点を提供した。第6走者である天願会員は、沖縄ならではの土地や文化を生かした保育の事例を紹介し、そのような地域に根差した保育の中にこそ、「対話的で、リゾーム型で、スローな」生き生きとした保育の物語が生まれていくことを示した。第7走者の川田会員は、「ローカルであること」には、祖先から受け継がれた伝統など〈過去〉としての側面と、その〈過去〉とのつながりをもちながら保育のなかで生成する〈いま〉としての側面があるという見方を提示した。それぞれの場所から「子どもとともに〈あす〉を生み出す実践」へ、という川田会員の提言を受け、第8走者の島本会員は、その実践を「子どもの権利」を中心にもう一段高いところにひきあげるビジョンを示し、乳幼児期が「民主主義の根っこ」であることを主張した。子どもの表現と主体的な生活を保障する保育は、「子どもと対等に生きる生活を社会に示す」実践でもあるのである。

このようにリレー討論を振り返ってみると、「地域に根差した保育」の実践は、子どもを育てることであると同時に、ローカルなコミュニティを育てる実践でもあることが見えてくる。子どもと保育者の育ちあいのコミュニティは、園と地域の育ちあいのコミュニティと深く結びついている。「つながりの文化」が見えにくくなつた現代社会において、園という場は多様な人々が共に暮らす在り方を再構想する、育ちあいの拠点として大きな意味をもっているのである。

## 村と庭

「ひとりの子どもを育てるには一つの村が必要」というアフリカのことわざがある。このことわざは、しばしば子育てをする「負担の大きさ」を示すものとして受け取られているが、筆者が重要だと考えているのは、多様な人とのかかわりが人を育てるという「育ち」への含意のほうにある。教育学者の大田堯が「ちがう・かかわる・かわる」<sup>1</sup>という言葉で述べたように、人は自分とは異なる他者の感性に触れることで変容していく。また、人とのかかわりのなかで継承される子育ての知恵や、助け合いのコミュニティは、「育てる」という営みを引き受ける養育者の側にとっても大きな影響を与えていく。リレー討論で語られたさまざまな事例が示してくれたように、園という場は、子育ての孤立や、世代間の隔たり、価値観の差異による分断をつなぎなおしてくれる、「村」を再創造する拠点となる可能性を秘めている。

しかし、「村」は強固なつながりの場であると同時に、閉鎖的で排他的な関係を生み出す舞台にもなりえる。町内会に出ないとゴミを出させてもらえないような「ムラ」には、人間の自由と多様性を奪う排他的な場に変わる危険性が潜在している。

批評家の宇野常寛は、一部の大企業がSNSや情報プラットフォームを通して価値観を規定する現代の

共同体にも、このようなムラ的共同体に通じる閉鎖性が存在することを見出し、それを克服する試みとして、「庭」という場の在り方に注目している<sup>2</sup>。「庭」は他者からの評価や承認を気にすることなく自分自身の価値観で創造することのできる場所でありながら、外部にひらかれ、予測不可能な出会いをもたらす。菜園を例にしてみるとわかりやすいように、そこは自分の場所でありながら、他者や動植物、無生物がかかわりあう場所でもあり、生命のつながりのなかにある。資本やプラットフォームによる構造化を逃れつつ、共同体のなかにありながらも、多様な仕方で創造することができる暮らしの場。それが「庭」である。

このように考えてみると、令和時代の保育における「園庭」の可能性が見えてくる。園に属する子どもたちの場所でありながら、地域にひらかれていく可能性を秘めた場所。コミュニティのなかに位置しながらも、自由で多様な「制作」が許された場所。

物理的な意味での園庭はなくても、地域とかかわりながら創り出す保育の活動が比喩的な意味での「庭」となっていくことはできる。園庭の代わりに隣接する公園の管理を引き受け、地域住民と共に暮らしをつくるような「庭」の在り方もある<sup>3</sup>。つながりの場としての「村」は、内輪で閉ざされた共同体ではなく、「庭」を通してひらかれつつ、園独自の創造性が地域のなかで生かされていく、生成的なコミュニティなのではないか。

共同体を鋭く批判する宇野の議論を経由して、あえてもう一度、「地域に根差した保育」の実践は、ローカルなコミュニティを育てる実践であると言つてみたい。自分たちの手で自分たちの暮らしをつくる保育は、コミュニティのなかで重要な役割を担つてゐる。日々の暮らしを楽しみながら、そこへやってくる多様な人々や生きものと、ひびき、まざり、わきだしていく新たな時代の保育を想像してみたい。

## 後注

<sup>1</sup> 大田堯『大田堯自撰集成2 ちがう・かかわる・かわる—基本的人権と教育』藤原書店、2014

<sup>2</sup> 宇野常寛『庭の話』講談社、2024年

<sup>3</sup> 下村一彦「公園の管理組織を保育所が担う意義と課題（1）—いふくまち保育園（福岡市）の事例を通して—」『東北文教大学・東北文教大学短期大学部紀要』第12巻、1-10頁、2022年

### ●Profile

山本 一成（やまもと いつせい）

滋賀大学 准教授

「保育の場で起る出来事の意味を言葉にする」ことをテーマに、教育人間学の研究をはじめ、近年は子どもたちのアニミズム的な世界に働く想像力（「生きているもののどうしの想像力」）の研究を行つてゐる。全国私立保育連盟ホームページにて研究成果（『Life（生活・人生・生命）を深める保育実践理論の探求』）を公開中。

# 『第79回大会を開催するにあたって』

大会実行委員長 遠藤 利彦

2026年度における日本保育学会第79回大会は、5月16・17日に、東京大学が担当させていただきます。実質的には、大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（CEDEP）が母体となって、準備・実施・運営等を担わせていただきます。このセンターは、日本学術会議第22期大型研究計画に関するマスター・プランにおいて「『乳児発達保育実践政策学』研究・教育推進拠点の形成：発達基礎の解明に基づく乳児期からの良質な保育・養育環境の構築」という申請テーマが採択されたことを受けて、2015年7月に、現在、学習院大学教授でいらっしゃる秋田喜代美先生が、初代センター長となって、立ち上げたものであります。文字通り、「発達保育実践政策学」という新たな統合学術分野を確立し、乳幼児の健やかな発達や充実した保育・幼児教育の実践およびそのための政策立案・改善等につながる先端的研究を推進することを設立趣旨としております。

発足時、その基本的な方向付けに関して様々な議論が重ねられた訳ですが、それを通じて掲げられたのが「あらゆる学問は保育につながる」というスローガンでした。立ち上げ当时、そこに関わった私どもの思いおよび願いは、そのまま書名となって2016年に東京大学出版会から発刊されておりますが、今度の大会は、初心に立ち返り、大会テーマをそのまま「あらゆる学問は保育につながる」とさせていただきました。私も最初期からこのセンターに関わっておりますが、当初、さすがに「あらゆる学問は」というのはいささか言い過ぎではないかと率直に思ったことがあります。しかし、研究会やセミナー等を積極的に開催し、従来、子どもの発達や保育・教育等との接点が希薄とされてきた文理、様々な学問分野の先生方のお話を重ねてお伺いする中で、「あらゆる学問は」という文言は決して盛り過ぎではなく、幅広く異分野との架橋の潜在的 possibility が実に豊かに拓けて在ることを確信しました。そして、私どもセンターの一つの使命が、文理、幅広く様々な学術的知見

を、保育および幼児教育の未来に確実につなげていくことなのではないかという思いに至ったのであります。

今回の大会では、「あらゆる学問は保育につながる」というテーマに適った企画を複数、準備しております。また、今回は基調講演ではなく、メイン・シンポジウムという形で、当時、センターの立ち上げに関わった先生を中心いて、このテーマの意味を再確認した上で、さらに深め抜け、新たな保育実践につなげ得るような試みをなしてみたいと考えております。この他に、国際シンポジウムと3つの実行委員会企画シンポジウムにおいて、普段、必ずしも直接、保育・幼児教育とはあまり関わりのないような話題にも可能な限り多くふれ、これからの中もたちの未来につながる保育・幼児教育の新たな形を、大会に参加される皆様、それぞれが考え、模索していく機会になればと望んでおります。

言うまでもなく、現在、日本では、多くの保育現場が深刻な保育者不足の問題に喘ぎながら、その一方では、各種養成校において保育志願者が大幅に減少してきているという由々しき事態が生じております。こうした状況下において、私ども、学としての保育に関わる者に求められること、それは、保育・幼児教育の重要性と可能性をしかと再認識し、確かな学術的根拠に基づきながら、広く社会に向けて、保育・幼児教育の豊かな魅力を、搖るぎない自信をもって語れるようになることなのかも知れません。今回の大会が、何らかの形で、その一助となればと切に願うものであります。

今大会は、オンラインでの開催となります。オンラインならではの制約が多く、想定されるところですが、慎重に準備を重ね、様々な工夫を凝らすことを通して、円滑な運営を実現し、ご参加の皆様にとって、愉しく意義ある催しになるように最大限、努めさせていただく所存です。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。何卒よろしくお願い申し上げます。

## ■第79回大会開催案内■

2026年5月16日（土）・17日（日）  
東京大学：オンライン開催（関東ブロック）  
大会テーマ：あらゆる学問は保育につながる

### ◆オンライン開催の方法について

自主シンポジウムや口頭発表の大会開催期間前動画作成はありません。なお、ポスター発表の場合は事前にポスターを作成、公開いただきます。  
各発表者には、大会当日にオンライン上で質疑応答を行っていただきます。これらをもって、学会報告をしたものとみなします。

第79回大会ホームページ  
<https://confit.atlas.jp/hoiku79>

### ◆直前参加登録について

2026年3月頃開始予定です。  
支払い方法はクレジットカード払いのみとなります。  
詳しくは、大会ホームページ及び第3号通信（2026年2月予定）をご覧ください。





## 千羽先生追悼文

### 日本保育学会の発展と千羽喜代子先生

関口 はつ江（東京福祉大学・大学院）

本学会名誉会員、元副会長千羽喜代子先生が昨年9月4日に94歳でご逝去されました。

先生は草創期のお茶の水女子大学家政学部児童学科において2回生として学ばれた後、同学科助手、都立母子保健心理指導員を経て、大妻女子大学にて34年間、東京福祉大学大学院にて5年間、保育学の研究と保育者養成に尽くされました。本学会が倉橋惣三によって1948年に創設された2年後の1950年に入会され、2003年に名誉会員になられるまでの間に、理事（現評議員）を8年間、常任理事（現理事）を8年間、副会長を12年間務められました。保育学年報、保育学研究の編集にはさらに長期間かかわられ、学会大会の準備委員長（現大会実行委員長）の任を第26回（1973年）と第38回（1985年）と2回受け持たれています。本学会の発展期にその要職を堅実に担われ、その生涯は本学会と共に在ったとも言えましょう。

また、第21回小児保健学会研究業績表彰（1974年）、産業教育110年記念教育功労者表彰（1994年）、全国保母養成協議会（現全国保育士養成協議会）貢献表彰（2003年）を受けられたことは、「子ども」「保育」の問題に総合的に取り組んでこられたことの証左で

もあります。先生のご研究は「子どもの自発性に基づく教育」の理念を根底において、「幼児の思いやり行動の発達」を中心として多くの実践にも取り組まれ、その方法は克明な実態の解明及び事実の検証にありました。観察するという意識を捨てて保育する者の1人として保育現場に入られた体験からの言葉、「保育現場での子どもの安全の保障は最も基本とすべき事であることは重々承知しているつもりであるが、身をもって実体験したこの目に見えない緊張感の重みを、第三者はどのように評価するだろう。（中略）心の内を開いた子どもは、私が離れても、どこかで私を求め、安心感を抱き、誼をしめす。『心が通った』という実感をもつ瞬時である。その実体験を経験した者とそうでない者との意識は決して同一ではなく、保育者としての最も基本となるこの2つの実体験は保育の原点であり、また保育者養成の原点でもある」（保育学研究第45巻巻頭言）は、研究法の進歩に伴う構成概念による事実の解釈、構築された理論の適用による、大人主体の保育研究、保育実践への忠告とも思われます。謹んでご冥福をお祈りしつつ、先生からの学びと共に在りたいと願っております。

### 研究者として人生を全うされた千羽先生

帆足 晓子（ほあしこどもクリニック）

千羽喜代子先生は、2025年9月4日に94歳で亡くなられました。亡くなられる1ヶ月半ほど前にお会いした時、「帆足さん、思いやりの研究ですけれど、まだ中途半端です。あれがどうしても気になります。完成させて下さい。」と最後まで研究者でいらっしゃいました。千羽先生には、大妻女子大学1年の時から約半世紀ずっとご指導を頂きました。実は、学生時代はあまり千羽先生との接点はなく、私は千羽先生の恩師の平井信義先生のゼミ・卒論でした。千羽先生は、乳児保育がご専門でした。お茶の水女子大学をご卒業後、東京都立母子保健院の乳児院（2002年12月末廃院）の心理職としてご活躍されたことが基盤になっていたと思います。1973年7月に財団法人日本児童福祉協会から発行された「保育所における乳児保育の研究」という厚生科学研究結果報告書があります。当時の厚生省（現厚生労働省）に平井信義先生が委託された研究で、1971年7月から同年11月にかけて調査・観察が行われた「保育所での乳児保育実施及び

普及に関する研究」と、この結果を基盤として1972年7月から1973年2月にわたって行われた「保育所における乳児保育実施上の諸要件に関する研究」の結果報告書です。千羽先生は、乳児保育実施上の諸要件に関する研究の「保育所乳児の保健・安全の基準」についての分担研究者でした。一人の保育者が受け持つ乳児は3人までとする必要があるとされています。

また、1982年から平井先生を中心とした保育者と研究者の思いやり研究会が始まり、ご一緒に毎月保育園に子どもの観察に行かせて頂いたりし、保育学会で22年間発表した成果が2005年「思いやりが育つ保育実践」（萌文書林）として1冊の本になりました。

千羽先生は永年保育学会で役職を務められる一方、子どもの自主性の育ちの研究や海外の文献にも精通されていらっしゃいました。そして、学会で発表される一つひとつの発表に真摯に向き合い、研究の前では何人も学究の途として差別することはありませんでした。ご冥福をお祈り致します。

## 海外リポート

### バンコクのスラムにおける子ども支援と教育実践 — プラティープ財団視察報告

安藝 雅美（学校法人芦屋学園 芦屋大学）

2023年8月、私はタイ・バンコクのスラム地域にある「デュアン・プラティープ財団」を訪れた。設立者プラティープ・ウンソンタム・秦氏は、「住所登録もできないスラムで育ち、「教育こそが生活を変える原動力」と確信。16歳の時、自宅で「1日1バーツ学校（約3円）」を開き、創造的な時間を子どもたちに提供し始めた。そこではモンテッソーリ教育を取り入れ、教材の多くは手作りだった」という。

現在では財団を通じて、スラムの子どもたちへの就学支援だけでなく、障害児への教育や親世代へのリーダー育成まで、地域全体を巻き込んだ包括的な支援が展開されている。視察した施設では、子ども一人ひとりの尊厳を重んじ、自己決定と主体的な活

動が保障されるよう、モンテッソーリ環境が整えられていた。

現地で印象的だったのは、支援される側である地域住民自身が教育や福祉の担い手になっていたことである。女性たちが現場で子どもたちを導きながら、自らの生きがいや役割を獲得している姿に、「教育とは個人の尊厳を支えるものである」と実感した。

本視察を通して、教育が地域を変える鍵となること、そして人が人を支えることで社会変革が起こることを確認した。日本の保育現場においても、共助的なまなざしと環境づくりの大切さを改めて考えさせられた。

### イタリアにおける公立保育の自由さと大らかさ

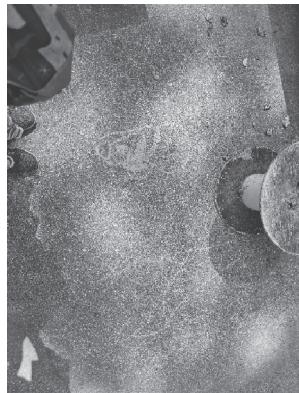
松山 綾子（東京経営短期大学）

77<sup>th</sup> World OMEP の SchoolVisit でイタリアの公立保育所「ニド・ルネッタ・ボローニャ」を見学させていただいた。ヴァカンスの時期とあり、普段は0から5歳児を受け入れているが、当日は1歳と2歳児は混合保育、3歳以上は1クラスでの保育であった。

突然の来訪者達に対し、さすが適応力の高い子ども。すぐに大人が近くに寄ってシーソーを揺らし始めると、笑顔を見せて、私も我もと遊びに加わり始めた。

また、園内も芸術のイタリアと言われるだけあり、入口の壁面から園内の随所が色彩豊かであった。一方で、日本と決定的に違う点は、時期的な問題か混合保育であるからか、教室の隅に荷物が纏められて出し入れがしやすくなっていた。

幼少期からのこのような自由さが、まさに「自由な子ども」を育てる土壌であるのかもしれないと思った。



園庭の片隅に描かれていた子どものチョーク画。ここにも Italy らしい多色彩が見られる。



子どもと保護者向け施設である旨と、「ニド・ルネッタ・ボローニャ」（保育所名）が Italy らしい、ポップで楽しげな色彩で描かれている。

## 若手会員派遣支援

### ドイツの幼稚園における子どもの「自律・自立」(Selbstständigkeit)に関する研究

大道 香織（広島大学大学院）

2024年3月にドイツザクセン＝アンハルト州マルティン・ルター大学ハレ＝ヴィッテンベルクで開催された、第29回ドイツ教育学会 (Deutschen Gesellschaft für Erziehungswissenschaft: DGfE) の自主シンポジウムで発表をしました。私はドイツの幼稚園における子どもの「自律・自立」(Selbstständigkeit)に関する研究で、ドイツの幼稚園の映像をもとに日本の保育者からインタビューを中心とした内容を発表しました。特に着目頂いたのが子どもの玩具の取り合いで起きた囁みつきの喧嘩の場面で、ドイツの保育者は映像の中で「囁むことは良くない」と明確に伝え子ども同士の議論が進むのに対し、日本の保育者は「なぜ囁んだのか」囁んだ子どもの囁むことの理由を重視し子ども同士で議論をするという、子どもの自律や自立の捉えや保育者の援助でした。初めは「自分がドイツ語で発表するなんて無理だ」と思っておりましたが、不十分なドイツ語の多くをフォローして頂き、会場も温かく終えることができました。自分の語学力の至らなさに悔しさは残りましたが、この発表の内容をもとに同学会で、私が筆頭となり葛藤を

テーマに共同執筆し、その論文の採択も決まりました。このようなチャレンジの場や後押しをしてくださったフェヒタ大学 (Universität Vechta) の Anke König 先生、指導教員の中坪史典先生には多大な感謝を申し上げるとともに、子育てしながら研究費取得が難しい状況にある中、このような若手会員派遣支援は大変な助けとなりました。今後も精進して参りたいと存じます。



DGfE での自主シンポジウム発表の様子

## 新刊図書の紹介

このコーナーは、会員諸氏が読まれた多様なジャンルの図書を保育学の視点から紹介していく  
ただき、保育研究と保育実践の発展のための一資料を提供することを目的とします。

### 『保育はジェンダーを語らない 不可視・不可避の性と語りなおしの実践』

天野諭（著）

かもがわ出版 発行日 2025年8月7日

「誰一人取り残さない」と言いながら、見えていない問題はないことにしていないか。「声なき声に耳を傾ける」ことの重要さを、ジェンダーの視点で突きつけてくるのが本書である。

本書はまず、子どもを無性的な存在と捉えることが、議論の起りにくさの根本にあることを指摘する。さらに、無意識に潜むジェンダー規範と、そこに当てはまらない子どもを逸脱者と見做し、理解を促すような声掛けによって差異を強化する構造を、解きほぐしてみせる。そして、人権侵害への即時介入を躊躇させる児童中心主義の限界にまで迫るとともに、「語り合いの環境構成モデル」を提案している。

ジェンダーレスがジェンダーバイアスにつながることや、ジェンダーニュートラルがそのものの魅力を減少させるなど、一筋縄ではいかないことも。自身の実践をふまえ、ジェンダー表現を排除するのではなく多様性を開くべきという提案に、ともに考えようとする著者の姿勢が窺える。(紹介者 本岡美保子)

### 『ゆめいろほいくえんのいちにち～いりょうてきケアのあるこもないこもじぶんらしく～』

NPO 法人 SmallStep 2025年3月16日

医療的ケア児支援法（医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律）の施行によって、「医療的ケア」という言葉は保育関係者に馴染んできたかもしれない。ただ、医療的ケア児のいる保育がどういうものなのかと問われると、まだまだ想像ができる人も多いだろう。

本書は、絵本の形で医療的ケア児がいる保育の一日を紹介している。本書の意義は3点ある。第1に、医療的ケア児のみならず、定型発達、肢体不自由の子どもも描かれており、多様な子どもたちが共生する保育に医療的ケア児の存在を位置付けている。第2に、共に遊ぶ場面が描かれており、医療的ケアをことさらに強調していない。第3に、子どもも読めるようにひらがなで描かれており、子どもと一緒に医療的ケア児のいる生活を考えることができる。

登場人物の紹介が「最後」にある。本書の子どもたちを「医療的ケア児」ではなく、まず「子ども」として読んでほしいというメッセージが感じられた。

(紹介者 松井剛太)

## ◆学生会員の登録（年会費の学生割引）申請について◆

学生会員の登録は、年度毎の申請が必要です。2026年度学生会員の登録を希望される方は、以下の手順で申請してください。

①学生証（2026年度の有効期限内であること）または、2026年度の在学を証明するものをスキャンし、画像データを準備してください。学生証の有効期限が裏面にある場合、裏面もスキャンし、画像データを準備してください。学生証に有効期限がない場合、在学の分かるものの画像データを準備してください。

②「会員マイページ」よりログインし、「会員情報」の「学生証」の欄に画像データをアップロードしてください。  
<https://jsrecce.smoosy.atlas.jp/mypage/login>



③ Google フォームへ必要事項を入力してください。

<https://forms.gle/Ftn7dLNMKXMYbS8QA>



受付期間 2026年3月20日～4月15日

- ・②と③の両方の申請が必要です。どちらか一方の場合は、申請が受理されません。
- ・申請が受理された方は、年会費が学生会員価格（5,000円）となります。
- ・期日を過ぎた場合は、一般会員での登録となります。

## 会報第195号原稿の募集

広報委員会では、以下の原稿を募集しています。ふるってお寄せください。

### ①海外リポート

研究や視察などで海外へ行かれた方や、海外在住の方は、海外の研究動向や保育に関わる情報を紹介してください。

### ②新刊図書の紹介

過去2年間に初版として出版された他者の図書で、興味深いもの、保育にとって有意義と思われるものを、感想を含めて紹介してください。ジャンルは問いません。

### ③私の文献リストから

研究や実践のために参照されている文献リストを紹介ください。文献は、著書、論文など15冊（篇）以内。内容の紹介は必要ありませんが、外国語の文献については、邦訳を付けてください。また、ご自身が、その文献を使って研究しようとしている（関心をもっている）分野についても、お書きください。

[字数] ①800字以内（写真1葉は200字に換算）

②400字以内

③800字以内

[締め切り] 2026年2月28日必着

[送付先] Mail : hoiku.info@jsrecce.jp

作成いただくデータはWordファイルでお願いします。ファイル名にご自身の名前を記載してください。

メールには、氏名、会員IDを明記してください。

## 編集後記

本号では、「架け橋プログラムのその後」を特集テーマにしました。幼児期と学童期をつなぐことは、継続的な検討課題になります。ミクロからマクロまで広い射程で考えつつ、最後は子どもに立ち返るような架け橋であってほしいと願います。

また今号では、名誉会員の千羽喜代子先生のご逝去に伴い、追悼文をお寄せいただきました。改めてご冥福をお祈りするとともに、先生のご遺志を学会で引き継いでいきたいと思います。

松井剛太

# 保育者が足りない！ 保育者のなり手がいない！ どうする？

2026.2.23(月・祝)  
13:00-16:00

オンライン開催 (Zoom Webinar)  
オンデマンド配信あり

お申込は  
こちら



## 参加費 オンデマンド配信含む

会員 1,000円  
非会員 1,500円

## 定員

500名 先着順

## 企画趣旨

近年、全国で保育者不足が深刻化し、配置基準の確保すら難しい園も増えています。若年層における保育者のなり手が減少する一方で、保育ニーズは拡大し、地域社会の持続可能性にも影響が及びつつあります。

本シンポジウムでは、行政、研究、実践の専門家をお迎えし、それぞれの立場から現状分析についてお話を聞くとともに、人材確保・保育者養成・職場環境改善などに向けた方途について議論します。日本の保育の未来を支えるために今、何が必要なのかを共に考える時間にしたいと思います。

## シンポジスト

石橋 紅乃 柴橋 正直 波岡 千穂 鈴木 健史

経済産業省 経済産業政策局 岐阜市長

堀川幼稚園 副園長

東京立正短期大学 准教授

## お問い合わせ

委員長

中坪 史典  
広島大学

委員

井桁 容子  
任意団体  
保育SoWラボ

鈴木 裕子  
愛知教育大学

三谷 大紀  
関東学院大学

三宅 茂夫  
神戸女子大学



hoiku.info@jsrecce.jp



<https://jsrecce.jp/>

一般社団法人日本保育学会 保育政策検討委員会

# 一般社団法人 日本保育学会 第9回 中部ブロック研究集会

日時

2026年3月1日（日）  
10:00～15:00

会場

名古屋外国語大学 名駅キャンパス  
(後日オンデマンド配信あり)



## 開催趣旨

本研究集会は、これまでのオンライン型を発展させ、対面を中心とした研究交流の場を設けます。中部地区および他地区的会員・非会員の交流を促進し、保育学の理論および実践双方の発展に寄与することを目的としています。

## プログラム

### ◆ シンポジウム（午前：対面＋オンデマンド配信） 「保育実践から研究者の在り方として何を学んだか」

登壇者：戸田雅美先生（東京家政大学）  
河邊貴子先生（聖心女子大学）



### ◆ 研究発表（午後：対面のみのポスター発表） 中部ブロックの会員による発表

### ◆ 実践報告（午後：対面のみのポスター発表）

幼稚園・保育所・こども園等の実践の工夫や課題（非会員発表歓迎）



## 参加費

- ・シンポジウム参加：会員1,000円／非会員 1,500円
- ・発表を行う場合：+1,000円（大学院生は無料）



第9回 中部ブロック研究集会要項  
参加・発表申込はこちらへ

※ 本研究集会は、名古屋市私立幼稚園協会主催「保育フェスタ」と同日・同会場で開催されます。  
※ 発表等の詳細は、申し込み時のpeatixのHPでご確認ください。

主催：一般社団法人 日本保育学会 中部ブロック

共催：名古屋学芸大学 ヒューマンケア学部

お問い合わせ先：一般社団法人日本保育学会 hoiku.info@jsrecce.jp

名古屋学芸大学  
NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS AND SCIENCES